

鑑賞教育教材としての書画

岡村 浩

序

学内講義「現代の書」「行書法」「碑法帖論」等で、拓本や書画肉筆資料を鑑賞教材として取り扱っている。印刷物では感得しえない臨場感を学ぶことが出来るものの、余程丁寧に解説をつけなければ、折角の価値観を伝えることは難しい。とかく初見者や学習経験の浅い人々にとっては、それら原資料も、汚れた古いものしか見えないことが殆どである。

これは場所を問わず、学外の活動でも同様で、また年令に関わらず年輩の方にとつても、理解に苦しむものに映っている場合が多い。

つまりは、日常からこれら書画掛軸文化がかけ離れていることに主因がある。そもそも生活空間において床の間、さらには畳が失われつつある。今、掛軸などは無用の、あるいは目に触れることすらない、遭遇してもゆつくり見る対象にならない。

そこで筆者は、「越佐文人研究会」を平成十年（一九九八）に組織し、毎年二、三回掛軸や扁額、色紙、短冊、手紙類の展覧会を企画してきた。伝統文化の見方をじっくり考え味わうことを目的とする。参加者は好事家ばかりではなく、ごく一般の方も多く含まれ、私にとつては、実はそのような方の理解や関心が如何に深まっているかの点に、自己の活動の手応えをはかっている。

本稿では、学外での掛軸を用いての展示活動を通し、その難解にみられがちな鑑賞法について日頃の経験の一端を記しつつ、ひいては近世近代の

和風文化の分析を試みたい。

坂田家について

新潟県五泉市の土堀つちほりという土地の旧家・坂田家に残った未公開書画の展示につき、筆者が解説会を平成二十六年四月末に行つた。この家は越前より移転し、幕末に庄屋を勤めている。当地は文政十三年（一八三〇）から慶応四年（一八六八）までの三十八年間、沼津藩の飛地領で、表高一万一千石であった。なお坂田家の家屋は平成二十三年（二〇一一）、国の登録文化財に認定されている。敷地約二千坪、主屋は約三百坪を有す。

同家に隣接する大沢川一帯には、絶滅危惧種の淡水魚・トゲソが生息し、これを観察保護することを目的に、数年前から敷地と家屋の一般公開がNPO法人・五泉トゲソの会の主催で、日時を決めて行われるようになっていた。

その際、家屋の内には大皿陶磁器の類、書画では欄間にかかる扁額や襖貼、衝立、屏風等に窺える分のみの美術品鑑賞に止まっていた。

当家過去帳によると、十四代目坂田常右衛門（五兵衛）は安政三年（一八五六）八十八歳没。十五代常三郎（号東木）は明治二十五年八十四歳没。十六代五郎次（婿）は早逝で、明治十六年没。十七代鶴松（号松園）は大正十五年六十三歳没。現当主は二十代恒衛氏。

俳諧貼混屏風

なぜここに書画が伝わったのか、理由を考えてみた。まず注目したのが、たぐさんの俳諧短冊を貼った珍しい屏風の冒頭に、十五代目が父の米寿（一八五六）、母の九十歳（一八六二）の長寿を記念し、四方の諸友から書をつのつたことを文久四年（一八六四）正月の筆で書き残したものの（注①）。他例をみても幕末では遠近問わず、このように知人の長寿を祝う慣習があった。裏返すと、一般のたしなみに文芸が浸透していたことを指摘出来る。十四代目がこのような趣味に深かったことにもよるが、次代が東木と号す俳人で、「咲きたれば松杉はなし山桜」「月壺つ名はいろいろや秋の暮」など、没年、明治二十四年十月八日にしたためた遺墨が残る教養人であった。

坂田家所蔵品の分析

今回たくさんの掛軸を調査したが、殆どの作者が判明するのがこれらの特徴である。大別すると、新潟県人と中央の名流とが揃っている。県人では長谷川嵐溪（三条の画人・一八一四〜一八六五）、松川藤蔭（同上・一八四三〜一九二〇）、片桐文畝（新潟の画人・生没不詳・一九〇九作）を紹介。中央の人物では中西耕石・春木南溟・高久齋厓・金井烏洲・滝和亭等。

耕石作は「曾て沈石翁の本を見る 時は丙辰の夏日に在り 耕石」と讀に記す。中国明の書画家・沈石田（沈周）の作を下敷に、干支の組合せで年を表記している点から、大正五年（一九一六）制作であることがわかる。また、春木南溟作には、「青山白雲久蕭瑟 忽驚坐上烟靄 南溟老人」（青山白雲久しくして蕭瑟たり、たちまち坐上の烟靄に驚く）と讀がある。「蕭瑟」とは、ひゅうひゅうと風が吹き抜けるもの寂しいさま。「靄」はもやのこと。筆者の山水作に描き込めたかったことが、このように詩書に綴られている。長谷川嵐溪作には「隔溪山遠近 繞屋樹扶疎 嵐

溪」（溪山の遠近を隔て、屋をめぐるて樹は扶疎たり）を記す。「扶疎」とは、木の枝が茂って四方に広がるさまである。見方として絵についている書を画讀といい、この文言に制作背景が伝えられていることに触れながら解説を続けた。

画材は大別して山水・花鳥・人物に分けられ、大抵は日本の実景ではなく、中国の景観や人物の服装を描いたものが多い。画も書と同じく、中国の模倣から道が開けたのだった。

図一 中西耕石讀

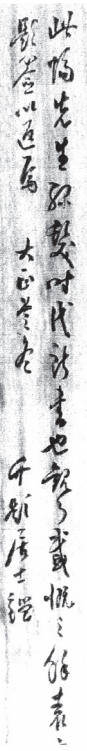
図二 長谷川嵐溪讀

箱書について

もう一つの観点として、箱書的重要性を説いた。村田香谷作「桃柳図」は作者自身の箱書で、これを「共箱」という。讀に「明治戊子夏日、北越客中に写す 香谷田叔」と記す。明治二十一年の作だが、別に県下三条市

に二十三年晩春作があるので、しばらく北越に滞在したのだろう。署名は雅号の下に「田」と苗字の一字、「叔」は名、中国趣味に依る記入法である。福岡生。よくある長崎で巨匠鉄翁に画を学ぶに止まらず、明治八年以来何度か中国に渡り、のち京・大阪・東京に名を広め明治四十五年八十二歳で没した。かの貫名崧翁に師事したこともあり、近似した穏やかな作風を示す。

讃岐の井内竹仙(注②)、この人が坂田家及び周辺に滞在し随分箱書をしている。佐久間象山書が二点あって、一点に「此の幅は先生緑髪時代書く所なり。之を観るに感慨の余り、表裏に題簽し、以てこれを返す」と、「緑髪」すなわち若書と認めている(図三)。もう一点は争坐位稿を学書した味の出た象山らしいもので、「予、東西歴遊中佐久間象山先生の書幅を観ること甚だ多し。十中八九はこれ贋本(にせもの)。今坂田君所蔵の書幅を観るに一見して嗟然(舌打ちする程の感動)、疑いなき者なり。此の如き佳什(大切にしまっておくもの)は得るに易からず。よろしく家宝として伝え愛せ」と記す(注③)。大抵このように讃辞をおくれば所有者を喜ばせたに違いない。何れも大正元年首冬の箱書。また『象山全集』(T2信濃教育会編)を開くと若干文に異同はあるものの(注④)、若書の方が掲載されていた。なお象山は天保九年(一八三八)借金依頼のため来越しているが、本作は土地ゆかりの作ではないであろう。



図三 佐久間象山作・井内竹仙箱書

五泉来遊者

次に箱書をした井内竹仙(注⑤)のように、五泉に来た人物作を紹介する。まず柚木玉邨。良寛の修行した倉敷の文人で、あちらに良寛佳作がまるとまっておりますのは越後柏崎の有力者・田代太白とこの玉邨の交流の賜であ

る。讀に「曉に坐し石楼寒く 秋晴れて光ること嘩々(はなやかに輝かさ)ま) 千山一夜の霜 紅葉ならざる樹はなし 庚申古重陽の後三日 瓊島仙館において写す」と付す。大正九年(一九二〇)作。「古重陽」とは菊を浮かべ酒を飲み邪気をはらう節句。絵は手のこんだ彩色秋景山水で美しい。なぜ玉邨が五泉に所縁をもつのか。ついでには彼の詩集『玉邨詩膳藁』(S16刊)をみると、「亡き友歌川秋南の墓を展ず(墓参のこと)」と題する詩が載っている(図四)。秋南は五泉を代表する教育者・詩人・名家(一八六二―一九二七)。「予、三往してこの墓を展ず」とあり、三回も墓参に岡山から来た位、両者は親交したのだった。比田井天来の筆になる「秋南先生教思碑」の撰文は玉邨が行っている。巨碑は市内八幡宮に建つ。

展亡友歌川秋南墓

歌川秋南名絢之字子素稱兼太郎秋南其號越後五泉人蒲原郡柄目木望族真柄貞清次子出嗣歌川氏篤學能文下帷授徒著有秋南文存爲人澹雅好酒愛客與余有莫逆之交其歿也予三往展其墓昭和癸酉暮春有此作。

秋南埋骨五泉隈日暮招魂酌酒來不識老夫自今後幾回得掃

墓門苔余時年六十九

癸酉暮春越後出雲崎謁良寛堂

大正十一年有志釀資移細民十七戶得土地三百坪新建堂稱良寛堂。匝以松樹十數株。表禪師舊宅址。佐藤耐雪所專周旋也。而我玉島圓通寺禪師二十年修禪之處。昭和七年有志建巨石於古松林中。勸禪師詩。是田代太白所斡旋。詩跋并書。余代住持所作也。

良寛禪衲舊棲躡新作孤龕新種松。却憶圓通精舍畔。豐碑十丈白雲封。

図四 柚木玉邨詩稿より

煙滅しかけた文士

もう一人、越後五泉に來た南画家・神楽江卷石（一八六三～一九三六）に触れたい。かねて巻石水墨マクリを入手して少しは興味があったのだが、今回拝見したのは赤壁賦双幅軸で、まさに入魂の出来といつてよい。幸い共箱作で、制作の事情がわかる。それによると、大正七年（一九一八）五月五泉に十日以上滞留していたところ、坂田氏が自分がつて明治四十四年（一九一）に描いた旧作双幅を携え來て、箱書きを求められた。直ちに開いて壁にかけてみると、以前來遊時の心境がよみがえってくる。今日の拙さに優る画拙なもので、赤面無言ながらついに箱書をしてこれを返す、と箱裏に長文を付記している。少なくとも二度は五泉を訪れていることになる（注⑥）。

肝心の略歴を探るには骨が折れ、「書品」22・23号（東洋書道協会・S26刊）に、弟子中村雍子による「神楽江卷石先生」の連載二文を管見にて知るのみであった。それを読むと文久三年（一八六三）播州生。中西耕石に画を学び十年余り北海道で塾を開き、のち十年間東京枢密院に勤め、退官後大正十一年上野池の端に移った翌年、関東大震災に遭い、京都洛北へ移住。そこで最愛の夫人を亡くし落胆、昭和十年酒田の本間家に招かれたものの、翌年七十四歳で病没。性格は曲がったことが大嫌いで他人の善行を人一倍喜び、膝をのり出して聞き終日機嫌がよい。金あれば旅をし飲む、友人の制言を排し自分の本拠を捨て去って行く、奇人中の第一人者。交友は限られ、友の数より友の質といい、東京時代中等教員試験には全て「我不知」の三文字を書く。これを知った杉聴雨は、かえって巻石を引き立てたというのだから、良き時代であった。夫人との別れの哀話の他、無欲恬淡の旅の生涯が綴られ、一層この巻石に興味を抱くようになった。

講演後のことだが、『巻石画譜』（T10刊）があることを知る。和綴しの高雅な一帙一冊本で、題簽は比田井天來の筆になる。

著名な文士

反対に、著名人では若き日の滝和亭が來ている。明治三十一年の大作を展示したが、これは神奈川での制作で所縁はない。鴛鴦・おしどり図（絹本）で、「浪暖桃香図 戊戌夏日寓于相州磯浦松林幽居 和亭力疾写時年六十有九」と讚にある。立派な作なのだが、どこか捷通りの出来で、潤規（価格表）に従って、それ以上は筆を施さない。また、後年有名になった護憲の雄・尾崎行雄（一八五八～一九五四）の珍しい坂田氏への為書作があった。彼は若い頃明治十二年（一八七九）、福沢諭吉の推薦で地元新聞の草分け「新潟新聞」の主筆となり、同十四年七月まで越後ぐらしをしたことがある。「罌堂」の雅号は、世間を驚かせ震わせる意をもつ。孤独を詩に詠みいよいよ本地を離れるところ、「議院を閉却し」「騷客多くはなし」と当時の心境を綴る。剣先のようにとがった書である。

初見の天來資料

初見の珍しい資料に、現代書の原点である比田井天來作品販布会趣意書があった。大正九年九月分で、書道館（のちの書学院か）建設の資金作りのために企画したもの。県下各地の地主が発起人としてたくさん名を連ねる。発起人に石崎清助・本間新作・香川鍊弥・吉田久平・歌川秋南・山岸栄樹・関塚惣吉・鈴木寅五郎の八名。その後新潟市・北蒲原・西蒲・三嶋・岩船・東蒲・南蒲・佐渡郡と全県の知名の士が名を連ねる。作品見本や紙の大きさと字数による「潤格」（料金表）が付いている（図五）。これが行われたとすると、天來の書は随分本県にあるはずだが、鳴鶴や一六程は残っていない。

<p>天來先生紙本潤格 (絹本ハ絹代トモ倍額トス)</p>		幅		額		大宣		中宣		小宣		屏風		<p>庚申八月</p> <p>書道館建設後援會</p>	
		<p>習字帖 行草每百字貳拾圓 篆隸楷每百字貳拾五圓</p>	<p>題匣 拾圓以上</p>	<p>帖册 (絹紙同格) 五圓以上</p>	<p>題簽 (同) 參圓</p>	<p>碑文</p>	<p>募標</p>	<p>全紙貳拾五圓</p>	<p>半紙貳拾五圓</p>	<p>全紙貳拾五圓</p>	<p>半紙貳拾五圓</p>	<p>全紙貳拾五圓</p>	<p>半紙貳拾五圓</p>		<p>全紙貳拾五圓</p>
		<p>字徑一寸五分以下每百字</p>		<p>字徑一寸以下每百字</p>		<p>丈一尺五寸以下每面 拾圓</p>		<p>丈二尺五寸以下每面 貳拾圓</p>		<p>丈四尺以下每面 參拾圓</p>		<p>丈六尺以下每面 五拾圓</p>		<p>屏風ハ二三行半截屏風ハ一行トス 幅ハ二三十字以內額ハ三四字 聯ハ五七言トシ額以外ノ書體ハ 行草ヲ例トス 字數多キモノハ別ニ定ム</p>	

図五 比田井天來 潤格

付属資料

以上、坂田家の初公開書画につき見方の一端を解説した。画讀・箱書・來遊文人中の著名家と埋没した人物、とかく書は読めない、画の山水は皆同じに映りがちなところを、興味を喚起するよう解説を心懸けた。

幕末以来これら坂田家の書画は、全くさわられることなく世に伝わった。冒頭に示した十五代の俳人東木の影響もあったが、十七代鶴松の時代において、とくに注目したい蒐集に関する姿勢がみられた。一つは新潟江戸中期の画人・五十嵐俊明(一七〇〇-一七八一)作に付随する書簡で、付近の骨董に詳しいとおぼしき人物に鶴松が真贋をたづねたところ、「たしかに保証の難しき物だが十中の八九通過する商品と定評」した返信(M41・8/21付)があった。慎重に購求に当たっていることと、俊明作の当時の鑑定がやさしいものではなく、早くから二七物が横行していた節が窺える。事実地方文人の割に俊明作には、古手の贋作が散見する(注⑦)。

もう一つの資料として、幕末北関東を代表する南画家で勤皇の志士・金井烏洲山水大幅(注⑧)に付随する葉書二通である。旧藏者東京小石川区の人物に作者烏洲の子孫と思われる者から、「其後は御音申上候 然らば其の何故たるを詳にせざるも烏洲の画に金谷泰の印章を用いしものしばしば有之候」と返答する内容(T9・4/25付)。烏洲の名が「泰」であるから、この印文はよい。

次の葉書が重要で、年不明ながら東京市麻布区書画骨董雜誌社より「御申込の烏洲山水画幅(金壹百五十六円五十錢) 貴方に落札に付本日引替郵便にて差出候 御受取可被下候」とある。つまり、今日よくある目録注文の末に入手した経緯が判明する。以上が十七代鶴松宛のもので、役場に勤務する安定した生活の中で旦那の趣味を引き継ぎ、少しずつコレクションに厚味を増したのだろう。鶴松の没したのは八十八年前の大正最後のとし、この頃県下では旧家の売立がしきりに開かれ、それがおよそ昭和十年位まで続いた有様が、多くの売立目録によって確かめられる。坂田家の分は次代の意向があったのだろうか、程よい量が封印されたまま、まさに文

字通りお蔵入りとなった。

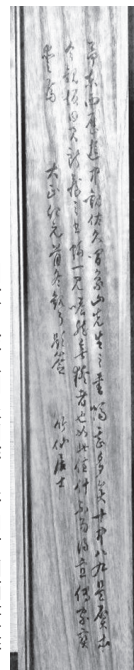
これまでの調査を加えて

筆者が初めて坂田家を訪れたのは数年前、主屋の公開が始まった頃である。床の間には永山盛輝県令の特大書が掛っていたが、別号の署名で、印文を読まなければ永山の書とはわからない。まず、この変わった書風の大幅に興味を覚えた。続いて、新潟市白山神社の社名石柱を書く前田黙鳳の扁額「徳不孤」があった。地縁がありそうでみつからない人物である。目を転じて貼混屏風数枚には、大小様々な書画の小切れが含まれ、中に和泉圓や池田孤邨・長谷川嵐溪といった県人作の他、中国人の作も散見される。明治の初めには、今では調べのつき難い訪中中国人が多くあったことが当時新潟新聞の記事で窺える。それら裏付資料になる遺墨が、坂田家に残っていた。

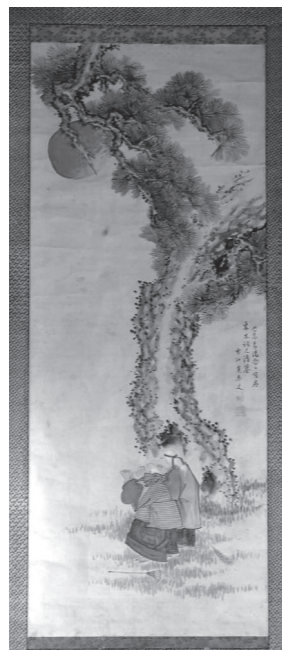
以上大まかに見た上で、さらに関係者の方から掛軸がたくさん伝わることを知らされた。以来、調査の機を得ることを鶴首してきた次第である。

この土地ならではの人物としては、和泉圓や中野雪江の名が挙げられる。例えば中野雪江は、天保二年（一八三二）生。滝和亭につき南画をおさめ、後年全国を遊歴して過ごしたという。明治二十四年（一八九一）六十一歳没。展示作は坂田東木あて為書「高砂図」（図七）で、讚に「己未青陽念日写 東木詞兄清鑒 雪江寛琴史」と記す。「己未」は安政六年（一八五九）、「念日」は二十日。雪江二十八歳、東木六十一歳に当り、年令の離れた二人が互いの趣味を尊重しつつ、身近なつり合いのとれた家柄の關係上、交友を結んでいた様子が推知される。筆者は偶然にも二十年程前雪江の末裔の方と知己となり、同家に残る資料の閲覧が叶ったことがあった。中に雪江の四十歳の祝いに、各地の文士から詩書画を贈られた品々が一括して伝世していた。僥倖にも一点、本間翠峰山水着色作を恵まれ、今回の講演の資料として、それを活用した。画讚には「溪山高隱 壬申暮春写以祝 雪江先生四十初度弟翠峰榮」とあり、明治五年（一八七二）制作。従来の雪江経歴にみる生年と符合する記述で、この年

西蒲原郡生の本間翠峰（二八四一～一八七七）が三十一歳時に贈ったもの。江戸の東条琴台や京の江馬天江等、広域の著名な人物作も多く含まれていた。かねて調査をしてきた資料の蓄積に、この度の企画は裏付けを探り断簡零墨の活用をはかった。



図六 佐久間象山作・井内竹仙書裏面



図七 中野雪江「高砂図」

鑑賞の着眼点

南画には、絵に書が付いている。書は漢詩の白文、書きぶりはくずし字で表記して、大半親しみは持てない。また絵本位で見ても、皆一緒の画題や風趣に映り、各作の個性まで捉えようとするのは容易でない。

別に作者に關しても、余程名の知られた人物以外は今日埋没してしまいい、取り上げられる機は極く限られている。

そこで、しばしば鑑賞の手引書が従前より刊行されているのだが、手に取り繕いてみると、読みほぐすには相当骨が折れる専門用語の列挙で、親しむには距離がある。

つまり最早鑑賞は、限られた趣味家の世界の逸事といってよい。絵がそのようなことから、書は加えて言うまでもない。

以上のことを意識しつつ、改めてこの鑑賞という問題を直視している。充分言辞を丁寧な解説し、具体的に価値観や見方に言及しなければ、より多くの興味はひきつけられない(注⑨)。

最後に、筆者がこの度の五泉市坂田家蔵品につき行った鑑賞会当日の次第(時間・一時間三十分)を掲出する。

〔坂田家一般公開と文化講演会資料〕

一、坂田家三代の紹介 (屏風・過去帳)

二、絵の見方 良い絵とは

画風 詩書(讚文) 印 表装

三、坂田家所蔵品の分析・代表作 名品

越後人作が多い： 五十嵐華亭 松川藤陰 長谷川風溪

明治期の来日中国作家を含む

地元五泉の人： 和泉園 中野雪江

来遊文人： 尾崎罌堂 神楽江卷石

箱書のある作： 本人の書と他者の書(井内竹仙)

添文のある作： 五十嵐浚明 金井烏洲 作

四、現代書の父 比田井天来資料

【展示作品】

短冊貼混屏風 坂田家第十五代 東木書付

中林竹洞 井内竹仙の箱書

滝 和亭 戊戌夏六十九歳 明治三十一年(一八九八)作

中西耕石 丙辰 大正五年(一九一六)作

佐久間象山 若書 竹仙箱書
佐久間象山 長文 竹仙箱書

松川藤陰 雪夜木菟図

春木南溟 大幅

長谷川風溪 大幅

柚木玉邨 庚申 大正九年(一九二〇)作 共箱(箱書己未一九一九)

五十嵐浚明 七十八歳作 坂田鶴松宛手紙付 明治四十一年八月

富岡鉄斎 蘭亭図 明治三十九年(一九〇六)作

中国 立峰 蘭亭図 明治三年(一八七〇)作

村田香谷 戊子 明治二十一年(一八八八)作

尾崎罌堂 為書

中野雪江 為書 己未 大正八年(一九一九)作

片桐文畝 己酉 明治四十二年(一九〇九)春作

金井烏洲 渡辺華石箱書 葉書二通付

神楽江卷石 双幅 赤壁賦

五十嵐華亭 二点

その具体的内容は本稿に記述した通りだが、総じて

① 郷土史研究の盛んな土地柄を顧慮した県史との接点

② 近世以降来越文人が多く、その足跡が現在であれば手を尽くして調査が可能であること

これを解題の主柱に掲げ、近世近代日本文化を味わうという、企画の意義を明らかにすべく努めたものである。

この坂田家書画鑑賞のつどいを主催したNPO法人・五泉トゲソの会ならびに坂田家御当主には、調査に際し特別の御高配を賜った。そもそも所有者関係者のかくの如き協力体勢がなければ、今回主人公になった先覚の遺作は時代の流れの片隅に取り残された、古めかしいものに過ぎない。

結びにかえて

最後に、本邦南画界を牽引した小室翠雲著『翠雲炬辺画談』（S10刊）より一文を引きたい。

世間一般の人々が、どうすれば書の見方さえも少しも心得ていないのではなからうかと、後で気付くようになった。こんなことじゃ折角見せる人も張合がなく、また見る人も心苦しいだろう。

欧米へ行って知ったことだが、あの地では人を訪問した際に、客人がこの主人に向かって折を見て、愛蔵の画を拝見願いたいと云うのが、礼儀の一つになっている。また知名な人になると、この様な愛蔵の画を見せて客人をもてなすのが社交の一つだと心得て、大抵の作品は持っている。もし客から求められて、見せてやる画を一枚も持っていないとなると、趣味に乏しく且つ教養の低いこととしてその家の主人の估券にかかわる。とりわけパリ辺りでは、この様な美風を保っているのが、貴人は云うに及ばず、あまり生活程度の高くない人でさえ、貴品を備えていて見せる。それはこのような美風に教化されているためで、自ずとカルチャーも豊かに且つ芸術味もたっぷりしている。華のバリと謳われ、また流行の中心地をなす所以もこの辺の理由から来ていると點首けた。これは日本に於いても同じことだ。もし訪問した家の主人が画幅を愛好していると思われたら、こちらから進んでそれを見せて貰うように求めるのが宜しく、それが社交の一つだろう。いやしくも好きで集めて持っているからには、それを人前に出して見せることが嫌いなはずはない。また見る人にしても、立派な絵を前にした時は、自ずと気分が晴れやかになるものだ。（現代かなづかいに改めた）

このように翠雲もまた時局の流れにあつて南画の凋落を氣にとめ、普及に腐心していたわけで、繰り返される流行の浮沈の中でかろうじて日本文化の一隅として、命脈を保ってきたことを有難く思わずにはいられない。

注

注① 短冊貼混屏風冒頭の原文を示す。

「我父五兵衛、安政三丙辰行年八十八、至御領主水野從出羽守様奉諸品拝領、母文久二壬戌行年九十有至同從御大守様奉御扶持米頂戴冥加之至四方之諸君子、予父母之長寿愛賜祝書余大歡喜而今此謹表時文久四甲子孟春謹識」

またこの但書の下には東木の二句が色紙にしたためられている。

「米文字我家に稀や日のはしめ」

「頂戴のいふふて父も今朝の春 東木」と記す。

なおこの屏風を調整した東木につき「過去帳」をみると、

「五代得氷院玄龍 東木居士 明治廿五年一月十三日死 俗称坂田常三郎事、俳諧ヲ好ミ 雅称白雲居東木ト称」と記す。

注② 井内竹仙（一八四五―一九一九）弘化二年、阿波郡市場町の藍商の家に生まれる。九州豊後の田能村竹田門下に南画を学び、のち長崎にて木下逸雲に就く。幅広い足跡を有し、本県にも来遊して小品水墨が散見される。

注③ 象山若書二行書の詩文は「一日二日香如煙 樓前花木紅映天 同棲双鶴善行酒 不用佳人舞繡筵」。竹仙の箱書には「此幅先生緑髮時代所書也 觀之感慨之余表裏題簽以返焉 大正首冬竹題居士鑑」とある。もう一点の竹仙箱書の原文は表に「象山先生誘東山秀色七絶」、裏面に「予東西歴遊中觀佐久間象山先生之書幅甚多矣 十中八九是贗本 今觀坂田君所藏之書幅一見 嗟然無疑者也、如此佳什不易得 宜伝家宝」と記す。

注④ 「春日」と題し、「二日三日香若煙（以下略）」とある（上巻・九三二頁）。坂田家軸では注③に示したように、「一日二日」となっている。又もう一点の方も『象山全集』に収録され（上巻・九九六頁）、これは同文である。

注⑤ なお、参考までに竹仙の箱書等を紹介しておく。高久露厓作の箱書表「露厓先生秋江戸独釣之図 坂田氏珍藏」裏

注⑥ 「霽厓先生之真跡觀于清流亭東窓 大正元年初冬 竹仙居士」
月儂作の卷留には、「月儂和尚人物画以外如此有活髮之作 感慨之
余書于幅裏 大正元年盛冬 竹仙居士」

注⑦ 卷石作「赤壁賦双幅」箱書裏を記す。
「戊午五月予遊五泉淹留弥旬河東阪田君携予辛亥旧作双幅来訪因索
題匣直展觀之于壁間对之則有(遊)曾遊之境之感而画拙優今日之拙然
無言者(以下略)」
葉書の文面を記す。

注⑧ 「中蒲原郡東村土掘 坂田鶴松殿(M41・8・21着) 青柳賢道
謹復 過日の浚明画評ニ付再度の貴問ニ接し汗顔至り 野老の浅見
無忌憚申上ケ候得ば、慥ニ保證の難き物ニテ雖然十中の八九通過ス
ル商品と評定仕候 尊命難黙止 愚見を陳スルモ必ズ證トセザル様
敢て懇願ス(以下略)」

注⑨ 金井烏洲作についてだが、渡辺華石の箱書表に「金井烏洲 秋溪間
釣図 逸品」裏面には「烏洲学画於春木南湖後摸宋元明諸家 □□
遂出一機軸此本益從藍田叔脱化 來筆力遒勁意取雄偉一展使人聳動
洵属生平傑作感歎之余書此以還之 華石渡辺雄監題」とある。讚
は「画之有浙派始自載進藍漢為極此図師之 己酉蘭秋 烏洲泰」。
作品脇に付したキャプションを一部掲出する。

▼「五十嵐浚明」(元禄十三年〜天明二年・一七〇〇〜一七八二・八二歳)
新潟の生んだ最も古い画人。京に上り、諸名家と交流し帰国後 多作
を残した。本作には「孤峰嵐浚明時七十八」と署名があり、一七七九年
作と判明。「孤峰」は別号。

なお、明治四十一年八月二十一付、村松町青柳氏の添文がある。当主
坂田鶴松は本作が本物であるかこの人物に鑑定を依頼したらしく、それ
に対して「保証の難き物にて然るといへども十中八九通過する商品と評
定」と答えている。それ位浚明作は当時人気があり、一方贋作が流布し
ていたのだろう。添文一枚によってこのように世相が窺え興味深い。

▼「富岡鉄斎」(天保七年〜大正十三年・一八三六〜一九二四・八八歳)
関西における南画は、勤王の志士の手によるものが主流になり、鉄斎
もその一人。幕末、月並なものに陥ったそれらに新しい息吹を与えた。
鉄斎芸術をいち早く認めたのは大正初期の洋画家達だったともいわれ、
南画にあるまじき飛びはなれた色彩感覚によって本作も描かれる。

画題は書の神様・中国の王羲之が永和九年(三三三) 蘭亭曲水の宴を
催したことによる。
名士四十一人が曲水に盃を浮かべ各自詩をつくり、その序文を羲之が
書いた。世に「蘭亭序」といい、その全文を上部に讚として付す。明治
三十九年(一九〇六)作。中国人・立峰の大幅と比べると、国柄や個性
が浮かび上がる。